

JCAS 次世代ワークショップ実施報告書（一橋大学大学院博士後期課程 高橋慶介）

21世紀のブラジルの様々な変化を検討する次世代ワークショップを企画し、「来たるべき『ブラジル研究』にむけて—政治経済の変化がもたらすもの—」と題して2011年1月22日（土）に上智大学中央図書館8階L-821会議室において開催した。

第一部では、近田亮平氏（日本貿易振興機構アジア経済研究所）による基調講演が行われた。「近年のブラジルの変化—1980年代から現在まで」と題する講演では、政治制度構築のための「政治」の80年代、経済安定のための「経済」の90年代、そして不平等社会是正のための「社会」の2000年代という、ブラジルの変化を捉える時代的枠組みが提示された。

第二部では、二つの研究報告が行われた。舩方周一郎氏（上智大学大学院）による「気候変動が迫る相互連携？—ブラジルにおける多層ガバナンス分析の可能性」では、経済成長や国際的役割の変化の中で地球規模の課題に対するブラジル国サンパウロ州の取り組みが議論された。同州の温室効果ガス削減義務規定を記した気候変動法（2009年）はブラジルの国家法に先んじて制定されており、その政策形成について国家や中央政府からの同州の自律性に着目しながら分析が行われた。高橋慶介氏（一橋大学大学院）による「新時代のブラジルにおける宗教的不寛容とレイシズム—ネオペンテコステ派によるオリシャ批判から」では、カンドンブレといったアフリカ起源の宗教に対するネオペンテコステ派からの批判の是非が、近年になってオープンに議論され始めたことが紹介された。この批判は西洋文化に対してアフリカ文化を劣位に位置づけながらも、人種について直接的には言及しないがために、その批判を即座にレイシズムとは位置づけ難い状況が分析された。

第三部のテーブルディスカッション、「日本におけるブラジルをめぐる研究環境の変化」は、上記の発表者に加えて、奥田若菜氏（神田外語大学）の司会のもと、ブラジルから **Andrea Lopes** 氏（サンパウロ大学）を招いて行われた。Lopes 氏からは自身の研究テーマである老年学、他にも環境問題といった、ブラジル国内で萌芽しつつある研究分野が指摘され、さらに国外研究者にも有用な情報検索システムが具体的に紹介された。また、ブラジルの今後の10年の展望について近田氏から提起されると、計20数名の参加者からは平等、大衆、統合といったキーワードが挙がり、コメントが相次いだ。さらに、中牧弘允氏（国立民族学博物館）からは日本、ブラジル双方の研究者による共同研究の重要性について指摘があった。そうした共同研究は、ブラジル人研究者の日本への招聘のみならず、日本人研究者のブラジルでの積極的な研究参加を伴う、相互交流のかたちになるだろう。